

目的：近年の核家族化と出生率の減少に伴い、出産・育児があるファッション性とおびてきており、出産・育児に対する情報や育児用品が著しく増加している。このような状況の中で母親はどのような意識をもって育児を行っているか、乳児期の栄養法とおむつの使用法を中心に調査研究を行った。

方法：調査は昭和62年12月上旬、2才未満の子供を持つ母親を対象に、質問紙によるアンケート調査を行った。調査地区は宮崎市内の若い世代の入居者の多い東花が島県営住宅と生目台市営住宅とした。回収率は83.6%、有効回答数は46名であった。対象児の月齢は、6ヶ月未満10名、12ヶ月未満13名、18ヶ月未満13名、24ヶ月未満10名であった。性別は男児24名、女児22名、兄弟のいる者23名、いはい者23名であった。

結果：初めに与える乳汁は、兄弟の有無にかかわらず、母親の年齢が高い方が母乳と生後早い時期に与えていた。母乳に関する知識については、初乳は全員が、成熟乳、オリゴ糖、タウリン、ビタミンK不足症は約半数の者が、移行乳、IgA、母子相互作用については約半の者が知っていた。紙おむつの素材である高分子吸収体や、アトピー性皮膚炎についてもほとんどの者が知っていた。離乳食に関して、兄弟の有無にかかわらず献立作成、調理有ることは、楽しいとも苦しいともどちらとも言えはいが半数と占めていた。一方食べさせることは、兄弟のいはい方で楽しいが半数を占めていた。おむつは、布・紙併用がほぼ半数であった。おむつの交換、洗濯については、兄弟のいはい方で楽しいと答える者が2割にのに対し、いる方ではどちらとも言えは、時々苦になるが9割を占めた。